

安立公彦句集

早春

SOU SHUN
Adachi Kimibiko

一冊の本が一人の俳人を生むことがある。
安住敦の『随筆歳時記』、それが原点だった。
そして五十年。
師に学んだ深い抒情は幾多の風雪を経て、
いま私たちの眼前へおもむろに浮上する。
待望の一巻ついになる。

露けさの
生あるものは
影を曳き

長女誕生

春宵の星みなやさし父となる

もの見ゆる瞳となりぬ若葉風

風鈴にさそはるるかに吾子眠る

秋惜しむ秋の歳時記書架に返し

葛飾に残る渡ししゃ花曇

ふるさとに母ある幸や賜日和

手を触れて幹あたたかき小春かな

軒打つはふるさとの雨なづな粥

旅に出たし櫛高枝に芽をかざし

別れ霜まぶしと思ふ若くはなし

消ゆるまで心豊かや春夕焼

楡に降る雨の白さよ辰雄の忌

分校の午後のオルガン麦の秋

夏惜しむ葉隠れ柿の青さにも

長女誕生

寒暁の四辺大地に見の産声

短日のわが影と会ふ街のかど

白魚や父の忌日の独り酒

ゆく春の何に涙や子の寝顔

熟寝子のどこも円しや風薫る

鴟仰ぎゐし子がわれに駆けよりぬ

秋涼し家郷のごとく水流れ

祝・大蔵木地亭さん

真間山に鵲聞く日々や新のれん

負ひし子に背ナあづけゆく冬の星

早春や水鳥の尾の波にゆれ

芽木の空若さ諾ふごと仰ぐ

干されゐて農衣は清し桃咲く村

花冷の夜は父の咳聞くごとし

蝸牛や勤めある身は影を曳き

佇みてわが掌の冬日たしかむる

わがねむる間も凍鶴は立ちをらむ

漁火も春の火色となりにけり

雨がちに菖蒲傾く夕廂

吹かれゐて行方あるかに竹落葉

幹若く梧桐は花をかかげけり

母退院二句

夕端居ことばすくなく母とをり

去りがたく樟は晩夏の日をかざす

花野来てたれかわが名を呼ぶ如し

思郷とは母恋ふことか赤のまま

花野暮れ振返りても人はあらず

秋海棠雨の休日すぎ易し

けふ暮れてけふの冬木のすでに遠し

ゆたかなる寒九の雨を賜はりぬ

日向薬師・月光菩薩

ふくよかに素足四温の塵を置き

月光も春のさむさの朱鳥の忌

秩父路の昼や蛙に目を借られ

四五本に尽きし夕日の桜かな

田を植ゑてふるさとはこの深みどり

浴衣着て塵勞闇に封じけり

天水の水もうごかず日の盛

子が播きし朝顔咲きぬ終戦日

少年に白雲とほき晩夏かな

著者経歴

安立公彦（あだち・きみひこ） 本名 安達健二

1931年 鹿児島市生まれ
1965年 「春燈」入会
1978年 第6回春燈賞受賞
1980年 「春燈」樹下集入集（同人）

東武友の会船橋店俳句講座講師

春燈叢書第175種

句集 きりしん 早春

平成の100人叢書⑥

2017年11月30日 発行

定 価：本体2800円（税別）

著 者 安立 公彦

発行者 奥田 洋子

発行所 ほんあみ 本阿弥書店

東京都千代田区猿樂町2-1-8 三恵ビル 〒101-0064

電話 03(3294)7068（代） 振替 00100-5-164430

印刷・製本 日本ハイコム株式会社

© Adachi Kimihiko 2017 Printed in Japan
ISBN978-4-7768-1346-0 (3062)